

病に蝕まれた体を表現

彫刻部門 兼原 啓二さん(59)

＝諫早市多良見町＝

第66回県展で、特別賞や県知事賞に輝いた8人の作品に込めた思いや今後の抱負などを紹介する。

第66回 県展

晴れの西望平和賞

のこぎりの痕が残るざらりとした表面の質感、細胞のミトコンドリアをイメージした黒く焦げた装飾。病が体を侵すさまを綿密な技法を駆使して表現した木彫りの「蝕まれたトルソン」が県展の頂点を射止めた。

長崎大教育学部の准教

授。今作の原点は約8年前に病気で亡くした母親。自覚症状がほとんどないままに進行し、「早く病気を見つけれれば」との思いに駆られたという。「トルソ」は人体の胴体
を意味する。頭部、胴体、大腿部の三つの部位で構

成。二つの木材をつなぎ合わせた胴体には、中の空洞が透けて見えるよう上下から伸びるスリットを施し、肉体が内側から蝕まれる様子を表現。接着面を超えてスリットを入れる作業は「新しい挑戦」だったが、「命の動きを感じさせるようならズムが出せた」彫刻を始めたのは大学入学後。見た目が細くても丈夫な木材に「不安定の中の安定」を感じて引かれ、主に社会問題を題材に木彫制作を続けてきた。一方で、今回の最高賞受賞にも、鑑賞者には「自由に感じてもらえれば」と委ねる。これからも謙虚に自分の思いを彫り出していく姿勢に変化はない。(嘉村友里恵)



「これからも社会問題を題材にした制作を続けたい」と話す兼原さん 一長崎市、県美術館（山下哲嗣撮影）